

〈原著論文〉

横井春野の人物像と女子野球普及活動

赤澤祐美*・來田享子**

1. はじめに

日本では、明治初年に近代的な教育制度が整えられてからしばらくの間、学校体育は男子を中心に考えられてきた¹⁾。明治期の知識人の多くは欧米への留学を経験しており、その経験を通して日本人の身体の「矮小さ」を認識することになる²⁾。そして日本人の「人種の改良」という目的のため母体としての女性の身体に焦点を当て、運動によって女性の身体の改良を図るようになる³⁾。明治後期になると、健康な母性という点からだけでなく、欧米の女性並の体格改善と気力の充実という点からも女性の身体運動が奨励され、女子の学校体育にスウェーデン体操やスポーツが導入されていった⁴⁾。

本研究で扱う女子野球は、このように女子体育が振興されていく時期に行われるようになったものである。庄司は、大正期の女性向け野球型スポーツ（総称「女子野球」）は全国各地の高等女学校で散見されるが、1921年あたりから女子野球批判が全国的に波及し、大正末期には「女子野球」のすべてが消滅したと指摘している⁵⁾。花谷らも、1925年を前後して相次いで女子野球は禁止され、数年で突如幕を閉じ沈黙期に入ったとしている⁶⁾。また高嶋は、女子野球が「消滅」したわけではないとしつつも、そのほとんどが大正末年に見られなくなったのは事実だとしている⁷⁾。

本研究で取り上げる横井春野は、先行研究によって女子野球が批判・禁止されたと指摘された時期に、女子野球の普及を試みた人物である。では、横井春野とはどのような人物であったのだろうか。本研究では横井春野に焦点を当て、著書や雑誌記事などからその略歴、野球およびそれ以外に関わった分野などから人物像を描き出すとともに、彼の女子野球普及活動について検討する。女子野球の普及を試みた人物に焦点を当てることで、当時の女子野球普及のありようや普及活動に対する世間の反応をより鮮明に描き出すことができると考える。

2. 方法

本研究では横井春野が執筆した図書・雑誌記事を中心に、横井春野や女子野球に関する記述が含まれた図書・雑誌記事を検討した。国立国会図書館デジタルコレクションの所蔵図書のうち、「インターネット公開」または「国立国会図書館/図書館送信限定」で公開されている資料について「横井春野」または彼の雅号である「横井鶴城」で検索した。「横井春野」で検索した結果は193件、「横井鶴城」で検索した結果は116件であった。これらのうち7件は、横井自身による著作物ではなかったことから、本研究では、デジタル公開されている横井の著作物302件を対象に分析を行った。対象とした文献の序文や巻末文には、横井の略歴や思想が示される傾向がみられた。そこで本研究では、特にこれらに着目し、横井の略歴、野球および野球以外に関心を持っていた領域、女子野球普及活動における考え方の観点から分析を行った。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部、** 中京大学スポーツ科学部

3. 結果

横井春野の著作物は野球や登山をはじめとする運動・スポーツや、能・謡曲など多岐にわたっていた。

3-1. 横井の略歴

1891年5月8日、横井は元尾張徳川藩士で歴史学者の横井時冬の長男として生まれる⁸⁾。父の時冬は、日本商業史研究の先駆者であり、経営史研究のなかでは大変有名な人物である⁹⁾。時冬の生れは愛知で24歳の時に上京し、東京専門学校（現、早稲田大学）に入学。晩年は早稲田大学商学部の創設に尽力し、1906年4月19日、横井が15歳の時に47歳の若さで亡くなっている^{10),11)}。

横井は6歳の頃から酒を飲み、煙草を吸い、これだけは時冬に叱られても警察官に叱られても治らなかったという¹²⁾。赤城小学校、早稲田中学校に通い¹³⁾、1909年に中学を卒業後、「官僚的学校を極端に軽視する己れの性質」と「注入教育の権化たる高等学校などに入学しては到底われ一流の研究は出来ず」との理由から、高等学校ではなく早稲田大学に入学し商業史を専攻した¹⁴⁾。早稲田大学在学中は、一に自己の生活費を得るために努力し、二に亡き父の遺業なる商業史の研究に従事し、その傍ら能楽史の研究に従事した¹⁵⁾。

大学卒業後は、東京府立第三中学校教諭や早稲田大学講師、大成中学校教諭、専修大学教授を務めた。1922年に第11期牛込区区議員に立候補し当選、複数期に渡って区議員を務めた^{16),17)}。また1929年には第15期東京市議員に立候補するも落選。そして1933年に再度立候補し当選¹⁸⁾。第17期でも当選するが、選挙違反の嫌疑により拘置所に収容されたこともあった^{19),20)}ようで、その後辞職している²¹⁾。

3-2. 能・謡曲との関わり

横井は『能楽画報』、『謡曲界』、『寶生』といった雑誌において多数記事を執筆し、雑誌『能楽新報』の編集にも携わった²²⁾。幼いころから謡曲を好み、8～10歳頃に中島正厚氏の門へ入って宝生流の謡を習い始め、中島没後は金子祐智に学んだ²³⁾。中学時代には、家事都合や病気などと言って学校を休み、図書館に通って能楽史料の収集に熱中していた²⁴⁾。明治の末年に「能楽教育応用論」を草して文部当局に提出し、当時の文部当局に「狂人扱ひ」されるが、それに屈することなく能楽の大衆化に向けて努力したと述べている²⁵⁾。また横井は能楽研究者として『能楽大事典』にその名が掲載されている。

3-3. 登山との関わり

横井は幼少の頃から山登りが好きで、明治末には「登山をして国民的年中行事たらしめなければならない」²⁶⁾と考え、熱心に登山を奨励するようになる。登山奨励の目的で、『富士と足柄』、『山めぐり』、『日本登山案内』などの図書を刊行し、「山岳で、體を練り膽（たん）を鍛へるは、單に男ばかりではない、女子にも必要である」²⁷⁾と述べている。「早稲田大学に在学してゐた頃には、あまりに登山に熱中すると云ふ理由で、学校当局から注意を受けた」²⁸⁾こともあったようである。

大正の始め頃から、登山の大衆化を促進させるために富士山や乗鞍ヶ岳などで野球大会や謡曲大会、野球謡曲大会を開催している²⁹⁾。しかし、これもまた「一般の人々から狂人扱ひにされた」³⁰⁾と述べている。横井はそのような状況の中でも明治末からの登山の大衆化運動を続け、『登山第一課』発刊当時の1931年には登山が大衆化したことを喜んでいる³¹⁾。

3-4. 野球との関わり

横井自身が野球を始めた時期についての記述は確認できなかったが、1904年、数えて14歳の時、雑誌、

謡曲、歴史、弁論、遠足、野球、絵画、考古の各部を有する少年教育の一機関である「元祿会」を創設した³²⁾と述べており、この頃には野球をしていたと考えられる。

能楽や登山と同様に、明治末年から大正の初めにかけて、横井は「野球技をして国民的ゲームたらしめよ」と唱導するが、「過激な説である」として相手にされなかった³³⁾。1913年に東京府立第三中学校の教諭として赴任した際には、校長に「貴君は、野球の奨励家ではあるが、当校では野球はやらせないことにしている、そのことだけを御注意しておく」と釘を刺されている³⁴⁾。同年、「野球教育応用論」を文部大臣に披瀝するが、東京府立中学の教諭であったために、「教育者として」野球を奨励するのは不謹慎である、という忠告を受けている³⁵⁾。これらは、1911年に繰り広げられた所謂「野球害毒論争」にみられたような野球排斥の一端であろう。しかし、当時青年客気の若者であった横井は「校長の言を用いず野球技の普及に努力した」と述べており³⁶⁾、1915年には『野球界』で6回に渡って「野球教育応用論」を解説している³⁷⁾。横井は野球それ自身は「教育上利益の多いものであって、決して欠点のないもの」であり、「若し是に弊害ありとすれば、野球其のもの、罪に非ずして、之を用ゐるものが悪いのである」と考えていた³⁸⁾。また横井は常々、受験的注入教育を施し体育を軽視し野球を排斥する教育者たちに苦言を呈しており、『野球界』誌上では、教育の改善を求めて、中橋徳五郎文部大臣や阿部浩東京府知事に向けて一書を呈している^{39), 40)}。

1919年の『野球界』9巻6号より、それまで主幹を務めていた小泉葵南にかわり横井が編集主幹を担うようになる⁴¹⁾。また1920年には糸井浅次郎らとともに大日本少年野球協会を結成し本部委員となる。しかしこの大日本少年野球協会は組織が大きくなるにつれて内部の対立が生じ、分裂する。横井は1927年に東京に同名の大日本少年野球協会を結成し主事を務めた^{42), 43)}。また横井は大日本軟式野球協会の主事も務めていた⁴⁴⁾。横井は著書の中で度々、「軟式野球の名づけ親は余であり、それが種を蒔いたのも余である」⁴⁵⁾ということ述べている。『軟式野球史』には軟式野球の功労者として横井が紹介されており、「少年野球、軟式野球の普及に尽した功績は大きい。戦前の青少年に野球を根強く植えつけた点で特に忘れてならない存在である」⁴⁶⁾と記されている。

3-5. 女子野球普及活動

横井は1920年の『野球界』において、男子だけでなく、女子の体力の発達に伴わなければ、国民体力の改造はできず、欧米列強は何れも男子の体育を奨励すると同時に女子の体育を奨励しているとして、女子体育の必要性を説いている。その上で名古屋高等女学校を体育奨励の模範校として挙げ、越原和校長を称賛している。そして女子に適する運動として、危険を伴わずにベースボールと同じ教育効果の得られるインドアベースボールを第一に推奨している⁴⁷⁾。この名古屋高等女学校長の越原和は、「私は、御誌の横井主幹とは、早大在学当時からの親友であって、早大に居た頃は一所にボールをした事もあるし、或る時は君の元祿クラブと試合した事もある」⁴⁸⁾と述べている。1924年には横井が大成中学の学生たちを連れて名古屋遠征をし、名古屋高等女学校の女学生たちともキツンボールの試合をするなど、越原との間には深いつながりがあったようである⁴⁹⁾。

1921年には女子野球団を組織すべく『野球界』誌上で選手を募集する⁵⁰⁾。「少女組、青女組、各組12名に達すれば組織す」としていたが、結果として希望者は1、2名しか集まらず、女子野球団の結成は実現しなかった^{51), 52)}。横井自身も「私の企ては、あまりにも、時代の尖端をゆきすぎたのだ」⁵³⁾と振り返っている。翌1922年に、御茶ノ水の教育博物館で開催される文部省主催の運動体育展覧会での女子野球の試合を計画し、名古屋・水戸・仙台の女学校を勧誘する。展覧会開催の3週間ほど前には、展覧会で野球戦を行う予定であるという新聞記事も出されていた⁵⁴⁾。しかし、水戸と仙台の女学校からは、実際には野球をやっているにもかかわらず、文部当局をはばかり「当校では野球をやらせていない」と断られてしまい、この展覧会での試合は実現しなかった⁵⁵⁾。

1923年、女子体育奨励のために様々な競技種目の指導法を紹介する『少女運動競技の仕方』⁵⁶⁾を出版する。この著書では「体育は男女平等たるべし」と述べており、「女子野球」、「インドアベースボール」、「キッツンボール」の3つの野球型種目も紹介している。

1931年には「女子野球の時代来る」⁵⁷⁾という記事を書いており、「野球技を行ふに際しては、まさしく男女平等である。私は、今後女子野球の普及に対して全力を注いでゆくべく決心してゐる。」と述べている。また同年の「女子野球は硬式か軟式か」⁵⁸⁾という記事では「軟式ならば女子に対しても過激でない」「近き将来に、大日本少年野球協会、大日本軟式野球協会の事業として少女及び青年女子の全国野球大会を催したい」とも述べている。さらに翌1932年出版の『少年軟式野球規則問答』では、女子野球に関する質問に対し、少年野球の大会への少女の参加や、軟式野球大会への男女混合チーム、女子チームの参加を認める旨を回答している⁵⁹⁾。今回の検討では、その後少女や青年女子が大会に参加したかどうかについては確認することができなかった。

4. まとめと考察

本研究では、女子野球の普及を試みたとされる横井春野に着目した。横井自身が執筆した図書・雑誌の記事を分析することにより、その略歴や、野球およびそれ以外に関わった分野などから人物像に迫るとともに、彼による女子野球普及活動についても知見を得ようとした。

横井の人物像および女子野球普及活動についての検討結果は、以下のようにまとめることができる。

- 1) 商業史研究者の横井時冬の長男として東京で生まれ、早稲田中学、早稲田大学に通い、その後教員や区会議員、市議員を務めた。
- 2) 野球以外にも、登山や能・謡曲などにも精通した人物であった。
- 3) 社会的に厳しい評価をうけながら、野球、登山、能・謡曲などを大衆化するとともに、教育に応用しようとした。その主張と活動は、当時としては先進的な考えを持つ「教育者」であったと考えられる。
- 4) 女子体育に関しても女子の体力・体格の向上の必要性を説き、欧米諸国に倣って男子だけでなく女子も運動をすべきだと考えていた。
- 5) 上記4)の考え方を土台に、女子野球との関わりを持つこととなった。背景には、早稲田大学時代の友人で、名古屋高等女学校長を務めた越原和の影響があった。
- 6) 女子野球普及のために、女子野球団の組織や運動体育展覧会での女子野球の試合を計画したが、当時の学校長等の教育関係者の無理解により、それらは実現しなかった。
- 7) 上記計画を断念した後も、指導書の出版、少年野球大会や軟式野球大会への女子の参加承認などを行った。

これらの結果について、若干の考察を行う。横井の野球奨励に対して周囲が批判的な反応を示した時期は、東京朝日新聞において「野球と其害毒」の連載があった1911年の翌年から翌々年にあたる。当時は、男性に対しても野球が及ぼす教育上の弊害が問題視されていた。そのような社会情勢の中で野球の普及活動を進めることは、教育者としての横井の立場そのものへの批判を引き起こした。野球害毒論争について石坂は、「論争は野球の弊害をめぐって展開されたのみならず、学歴主義という制度的編成に付随する諸問題、さらにはその結果として生じた官・私という対立軸による象徴闘争を包括した『教育論争』として成立していた」⁶⁰⁾と指摘している。横井の執筆物からは、官僚的教育・受験的注入教育がなされている現状を批判的に捉え、それを変化させるための教育的な活動として野球を奨励・普及しようとしたことがうかがえた。それを考慮すれば、横井が野球害毒論争に強く反発するのは当然であった。

時代の影響を考えれば、男子の野球以上に女子野球普及活動の障壁が高かったことは容易に理解でき

る。高嶋による先行研究では、女子野球団の結成という横井の計画を断念せざるを得なくなった状況について「この反応の少なさには、女性の読者がほとんど居なかったであろう『野球界』そのものの問題が大きく関係していよう」⁶¹⁾と指摘されている。1920年代に、女子野球団の結成や運動体育展覧会での女子野球戦の実施を断念せざるを得なかった横井は、1930年代に入ってから野球大会への女子の参加を認めるという方策をとった。しかし、この方策をとった時期には、再び学生野球の弊害が問題となり、1932年には文部省訓令第四号「野球の統制並に施行に関する件」、いわゆる「野球統制令」が発令されている。「野球統制令」によって小学校の野球（少年野球）は対外試合の実施条件が厳格化され、主催者も限定されることとなった⁶²⁾。これにより横井が主事を務める大日本少年野球協会も大会の開催が不可能となり、横井が構想していた少女への野球の普及は道を絶たれることになったと考えられる。

一方で、東京家政女学校及び牛込高等女学校の校主を務める西澤浩仙への『野球界』のインタビュー記事において、記者に軟式野球部創設を勧められた西澤は「この新学年から野球部を設けましょう」と話している⁶³⁾。この記事では記者が西澤に対し、大日本軟式野球協会が大会への女子の参加を公式に認めたことを伝え、さらに野球部を新設した後の試合相手として、越原⁶⁴⁾が校長を務める名古屋高等女学校を紹介している。西澤は横井と共に第13期牛込区会議員を務めていた人物であった⁶⁵⁾。女子軟式野球を奨励する内容のこの記事には、横井を結末点としてつながりのある人物が登場していることから、取材そのものが横井の関与によるものである可能性も示唆される。加えて、この記事は、女子軟式野球に関する歴史研究上の重要な課題を示すものであると理解すべきであった。先行研究では、女子軟式野球は1925年前後に「消滅」に追いやられたと結論付けられてきた⁶⁶⁾。記事には、1930年代における女子軟式野球実施の可能性が示唆されており、この点については今後さらなる検討が必要であると考ええる。

また、横井が女子軟式野球を普及しようとした時期には、女性と野球をめぐる別の動きが見られる。それは、芸妓や女給、ダンサーといった女性の野球団が続出し、試合も行われていた^{67), 68)}ことである。これらは、女性が行う野球を「見せ物」として扱う動きであると考えられ、横井が目指していた教育の一環としての女子野球とは一線を画するといわざるを得ない。女性による「見せ物」としての野球、すなわち芸妓野球を横井はどのように捉えていたのだろうか。芸妓野球は、教育的な活動としての女子野球にどのような影響を与えたのだろうか。こうした疑問についても今後検討していきたい。

注および引用参考文献

- 1) 梶原宏子「明治後期の日本における女子体育の発展—学校体育教材の変遷に着目して—」『運動とスポーツの科学』17巻1号, 23-32頁, 2011年.
- 2) 春日芳美・友添秀則「戦前期の女子体育振興に関する史的研究:大正期を中心として」『体育学研究』57巻, 177-189頁, 2012年.
- 3) 角田聡美「女子体育における身体への政治—『婦人衛生会雑誌』の分析を中心に—」『スポーツ社会学研究』8巻, 73-85頁, 2000年.
- 4) 前掲1)に同じ.
- 5) 庄司節子「近代日本における女性スポーツの創造—大正期の東海女學生キツンボール大會への視線—」『創造とスポーツ科学』, 57-71頁, 2011年.
- 6) 花谷建次・入口豊・太田順康「女子『野球』に関する史的考察(Ⅱ)—日本女子野球史—」『大阪教育大学紀要第Ⅳ部門』45巻2号, 289-302頁, 1997年.
- 7) 高嶋航「女子野球の歴史を再考する—極東・YMCA・ジェンダー—」『京都大學文學部研究紀要』58号, 165-207, 2019年.

- 8) 小林貢・西哲生・羽田昶『能楽大事典』, 筑摩書房, 2012年, 924頁.
- 9) 夏目琢史「横井時冬論: 商人・職人を中心とした, もうひとつの『国史』研究の可能性」『一橋大学附属図書館研究開発室年報』3号, 13-34頁, 2015年.
- 10) 同上.
- 11) 工藤恭吉「横井時冬と早稲田大学商科」『早稲田商学』249号, 31-41頁, 1975年.
- 12) 横井春野『能楽談叢』, サイレン社, 1936年, 223頁.
- 13) 同上, 222頁.
- 14) 横井春野『能楽全史』, 龍吟社, 1917年, 卷末1-3頁.
- 15) 同上.
- 16) 東京市牛込区編『牛込区史』, 東京市牛込区, 1930年, 214-234頁.
- 17) 「3区区議選開票結果」『読売新聞』1930年3月4日朝刊, 2頁.
- 18) 松尾繁弑『最終東京市会議員誌』, 都市情報社, 1943年, 296頁.
- 19) 「横井市議違反 けふ収容か」『東京朝日新聞』1937年4月23日夕刊, 3頁.
- 20) 横井春野「平野清君を想ふ」『謡曲界』50巻4号, 80-82頁, 1940年.
- 21) 前掲18), 299-300頁.
- 22) 前掲8) に同じ.
- 23) 前掲14) に同じ.
- 24) 同上.
- 25) 前掲12), 巻頭(頁記載なし).
- 26) 横井春野『何の山へ登らふか』, 行人社, 1927年, 巻頭1頁.
- 27) 横井春野『日本登山案内』, 白揚社, 1925年, 巻頭1頁.
- 28) 横井春野「登山史話」『野球界』臨時増刊号山岳写真大観, 112-113頁, 1931年.
- 29) 横井鶴城「国民体力改造論より見て登山法を奨励す」『野球界』9巻9号, 1-9頁, 1919年.
- 30) 前掲28) に同じ.
- 31) 横井春野『登山第一課』, 文豪閣書房, 1931年, 巻頭1頁.
- 32) 横井春野『百人一首の研究: 附・歌留多のならべ方及取方法』, 元禄会, 1912年, 巻頭2頁.
- 33) 横井春野『野球用語小辞典』, 白揚社, 1930年, 巻頭1頁.
- 34) 横井春野『野球通になるまで』, 野球界社, 1930年, 巻頭1頁.
- 35) 横井春野『野球の極意』, 文豪閣書房, 1931年, 巻頭1頁.
- 36) 前掲34) に同じ.
- 37) 横井春野「野球教育応用論(一)~(六)」『野球界』, 1915~1916年.
(一) 5巻10号, 6-8頁 / (二) 5巻11号, 6-8頁 / (三) 5巻12号, 2-5頁 / (四) 6巻1号, 4-6頁 / (五) 6巻3号, 1-3頁 / (六) 6巻4号, 7-9頁.
- 38) 横井春野「野球教育応用論(一)」『野球界』5巻10号, 6-8頁, 1915年.
- 39) 横井鶴城「文部大臣中橋徳五郎君に一書を呈す」『野球界』10巻5号, 2-6頁, 1920年.
- 40) 横井鶴城「体育問題に就いて阿部東京府知事に一書を呈す」『野球界』11巻4号, 2-5頁, 1921年.
- 41) 横井春野「編輯を引き受けるに際して」『野球界』9巻5号, 3頁, 1919年.
- 42) 全日本軟式野球連盟編『軟式野球史』ベースボール・マガジン社, 1976年, 24-25頁.
- 43) 文部大臣官房体育課編『本邦ニ於ケル体育運動団体ニ関スル調査. 昭和5年度』1931年, 154-155頁.
- 44) 文部大臣官房体育課編『本邦ニ於ケル体育運動団体ニ関スル調査. 昭和7年度』1932年, 146-147頁.
- 45) 横井春野『軟式野球コーチ』, 博進堂, 1930年, 巻頭1頁.
- 46) 前掲42), 118頁.

- 47) 横井鶴城「女子体育問題を論ず」『野球界』10巻8号, 2-6頁, 1920年.
- 48) 越原和「女子に野球を奨励す」『野球界』9巻8号, 12-14頁, 1919年.
- 49) 横井鶴城「大成中学の名古屋遠征記」『野球界』14巻6号, 26-29頁, 1924年.
- 50) 横井春野「女子野球団を組織せんとす」『野球界』11巻8号, 125頁, 1921年.
- 51) 横井鶴城「女子野球回顧」『野球界』16巻5号, 97頁, 1926年.
- 52) 横井春野「女子野球の時代来たる」『野球界』21巻1号, 17頁, 1931年.
- 53) 同上.
- 54) 「月末から開く運動展 水戸, 仙台高女の野球戦も行ふ」『読売新聞』1922年4月6日朝刊, 6頁.
- 55) 前掲51) に同じ.
- 56) 横井春野『少女運動競技の仕方』, 三徳社, 1923年.
- 57) 前掲52) に同じ.
- 58) 横井春野「女子野球は硬式か軟式か」『野球界』21巻14号, 191頁, 1931年.
- 59) 横井春野『少年軟式野球規則問答』, 大日本軟式野球協会, 1932年, 320-232頁.
- 60) 石坂友司「『野球害毒論争(1911年)』再考—『教育論争』としての可能性を手がかりとして—」『スポーツ社会学研究』11号, 115-127頁, 2003年.
- 61) 前掲7) に同じ.
- 62) 全日本軟式野球連盟編『財団法人全日本軟式野球連盟50年史』, 全日本軟式野球連盟, 1931年, 8-9頁.
- 63) 「ファン百傑小伝 女子チームを計画する西澤先生」『野球界』21巻5号, 125頁, 1931年.
- 64) 横井と越原和については野球に関して繋がりがあったことは本稿でも触れたとおり明らかになっている。一方で、この時期の名古屋高女の校長は越原和の妻・春子に交代していることから、記事が指す「越原と云ふ校長さん」がどちらを指すかは明らかではない。
- 65) 東京市役所編『東京市職員録』, 若松印刷所, 1932年, 232-233頁.
- 66) 前掲7) に同じ.
- 67) ミヤケマサナリ「芸妓女給野球大試合」『野球界』20巻18号, 142-143頁, 1930年.
- 68) 「運動界総まくり」『野球界』21巻4号, 154-155頁, 1931年.